

尾崎士郎記念館企画展

「政治青年から文学者への道」

— 社会主義運動と初期の作品 —

平成24年7月31日～平成25年1月27日



ばいぶんしゃ
「売文社」の人々 大正7年 士郎20歳、売文社の社員となった頃
左端茂木久平、1人おいて高島素之、中央北原龍雄。 背後の額はマルクスの肖像。

■ 開催にあたって

士郎は、旧制愛知第二中学校（現岡崎高校）在学中から政治雑誌に論文を投稿し、校内弁論大会で熱弁をふるうなど、政治少年として一目置かれる生徒でした。早稲田大学高等予科政治科進学後は、大学を二分して争われた「早稲田騒動」のリーダーとして活躍し、士郎の情熱は学業よりも当時世論の関心が高まっていた普通選挙運動や社会主義運動に向けられていきました。士郎は当時の社会主義運動の本丸であった堺利彦が設立した「売文社」に籍を置き、社会主義関係の書籍の執筆や雑誌に論文を発表しています。

しかし、知識階級である自分達が労働者のための社会を目指す社会主義運動に疑問を抱き、「売文社」の分裂に際して活動家たちの偽善的態度を目の当たりにし、社会主義活動からは身を引く決意を固め、文学者としての道を歩み始めます。

本企画展では、政治活動に専心した若き日の士郎とともに、文学者としての初期の作品を紹介します。



- ① 右:尾崎士郎 共著『欧米社会運動者評伝』 左:尾崎士郎 著『近世社会主義発達史論』
売文社時代に執筆し、士郎が21・22歳ではじめて出版した単行本。
- ② 雑誌『批評』
大正デモクラシーの論客として知られる室伏高信が主筆として、士郎とともに創刊した雑誌。編集発行印刷人は尾崎士郎となっている。
- ③ 士郎原稿「売文社の帝王たち」
『読売評論』昭和25年8・9月号掲載。売文社創立者の堺利彦を中心に社内の人間関係や分裂に至る経緯を回想している。

■ 文学者としての歩み

社会主義運動に疑問を抱いた士郎が、小説家としての一步を踏み出す契機になったのは、大正10年1月に『時事新報』懸賞小説で入選したことである。

その直後、当時気鋭の雑誌『改造』を主宰していた山本実彦から、破格の現金を渡されて長編小説執筆の依頼を受けた。気をよくした士郎は、茨城県の湯ノ網温泉、福島県^{あかいだけ}閼伽井嶽（現いわき市）の山寺に籠もって執筆を行ったが、思うように筆は進まず、東京へ帰って居候先の高島素之宅にて長編『逃避行』『懷疑者の群』の2冊を完成させた。程なく2作品は改造社より出版されることになったが、無名作家の処女作に対する文壇の反応は皆無に等しかった。その後、山本社長の援助により上海に3か月間滞在するが、まとまった作品を執筆することができず、山本の士郎への援助は打ち切られた。収入を絶たれた士郎は困窮し、小説家を目指す大学の後輩を頼って千葉県御宿海岸の寺で共同生活を送りながら執筆を行った。

大正12年、士郎は当時すでに新進作家との評価を受けていた宇野千代と知り合い結婚する。その後、短編作家として文壇に一定の地位を築くが、小説家としての名声が世間に認められるのは、昭和10年出版の『人生劇場』を待たなければならなかった。



尾崎士郎 著『逃避行』『懷疑者の群』

副題「低迷期の人々」1部・2部として執筆された作品で、売文社における経験を題材に取る。あまりに事実^に忠実であったため当事者の反感を買い、師と仰いでいた堺利彦や尊敬していた高島素之らとの人間関係にひびが入ることになった。

士郎の社会主義活動 年譜

年	歳	事 跡	著 作 等
大 正 3	16 歳	愛知県立第二中学校4年在学 校内弁論大会で「現代学生論」を論じる 級友大須賀健治（山川均義弟）宅で大逆事件の資料を読む	「教育亡国論」を『第三帝国』に発表
4	17 歳	『世界之日本』懸賞論文に応募して入選 早稲田大学教授永井柳太郎と文通し、早大進学を決意 愛知二中卒業	「まず教えよ」を『世界之日本』に発表 「尾崎幸雄氏のために弁ず」を『雄弁』に発表
5	18 歳	4月 早稲田大学高等予科政治科入学 10月 父嘉三郎死去	
6	19 歳	7月 予科修了 「早稲田騒動」の首謀者として活躍 9月 本科政治経済科入学 8月頃 東洋経済新報社に記者として入社（半年ほどで退社） 12月 普通選挙運動の首謀により「特別要視察人」に指定	
7	20 歳	6月 長兄の重郎が自殺し実家破産 10月頃 売文社に入社	
8	21 歳	1月 早稲田大学を除籍 3月 売文社分裂 高島素之らと売文社に残る 秋 肋膜炎で入院	雑誌『国家社会主義』（売文社発行）の創刊 雑誌『批評』（室伏高信主宰）の創刊 『欧米社会運動者評伝』（茂木久平と共著）出版
9	22 歳	売文社解散後『毎夕新聞』に記者として入社 まもなく退社 『東京毎日新聞』言論班入社 3か月で退社 『資本論』の翻訳中の高島素之宅に滞在 社会主義運動からの決別を決意 小説家の道へ	『近世社会主義発達史論』出版
10	23 歳	1月 『時事新報』懸賞短編小説に応募「獄中より」が2位入選 3月 改造社社長山本実彦からの依頼で、茨城県湯ノ網温泉、福島県いわき市関ヶ井嶽の僧堂にて小説執筆	『逃避行』（「低迷期」の人々第1部）出版
11	24 歳	3月 山本社長の勧めで上海・蘇州に3か月滞在 7月～ 千葉県御宿海岸の廃寺に滞在 困窮生活	『懷疑者の群』（「低迷期」の人々第2部）出版 「獄室の暗影」を『改造』に発表
12	25 歳	1月 本郷「菊富士ホテル」に滞在 新進作家 宇野千代と出会い5月に結婚 9月 荏原郡馬込村の農家の納屋を改築して移住	「短銃」を『早稲田文学』（後に「三等郵便局」に改題）に発表 「凶夢」を『我観』に発表 川端康成が激賞

展示品リスト

No.	資料名	年代	種別	備考(資料No.)
1	「弁論大会の士郎」愛知二中4年	大正3年	写真	『書簡筆滴』より
2	『人生劇場青春篇』第38回 中川一政筆挿絵原画	昭和8年『都新聞連載』	挿絵原画	
3	『人生劇場青春篇』第39回 中川一政筆挿絵原画	昭和8年『都新聞連載』	挿絵原画	
4	「売文社社員たち」	大正7年	写真	『書簡筆滴』より
5	売文社広告 [2種]	明治～大正7年/大正8年	印刷物	『へちまの花』/『国家社会主義』より
6	中江兆民書「文章経国大業不朽盛事」	明治34年1月	書	
7	士郎原稿「売文社の帝王たち」	昭和25年	原稿	
8	『読売評論』2巻7号(「売文社の帝王たち2」掲載)	昭和25年9月	雑誌	051/ヨミ/5009
9	士郎共著『欧米社会運動者列伝』	大正8年10月	士郎著作本	0S/2
10	士郎共著『欧米社会運動者列伝』広告(『国家社会主義』掲載)	大正8年	印刷物	051/コツ/3304
11	士郎著『近世社会主義発達史論』三田書房	大正9年12月	士郎著作本	0S/3
12	士郎訳 ブランデス著『フェルナンド ラッサルレ』黎明閣出版	大正12年4月	士郎著作本	0S/6
13	雑誌『国家社会主義』(復刻版)1～4号合冊	大正8年	雑誌	051/コツ/3304
14	雑誌『批評』創刊号他	大正8年3月創刊	雑誌	051/ヒビ/1903
15	室伏高信原稿「少女のようなハニカミ屋」(『瓢々録』原稿)	昭和40年	原稿	
16	『人生劇場愛欲篇』題字 中川一政筆挿絵原画	昭和9年『都新聞連載』	挿絵原画	
17	『人生劇場愛欲篇』58回 中川一政筆挿絵原画	昭和10年『都新聞連載』	挿絵原画	
18	雑誌『文章倶楽部』大正14年1月号 「私の事 後継文壇家の一人一話」	大正14年1月	雑誌	士郎・宇野千代写真掲載
19	雑誌『新小説』大正13年2月号 尾崎士郎著「痴情」	大正13年2月	雑誌	
20	新聞『時事新報』大正10年1月21日号夕刊 「懸賞短編小説の作者」	大正10年1月	新聞	士郎二等
21	宇野千代写真(『私の文壇生活を語る』昭和11年より)	大正14年1月	写真	
22	尾崎士郎30歳頃写真(『新進傑作小説家全集 第十巻』昭和4年より)	平成4年	写真	
23	士郎著『逃避行』改造社	大正10年11月	士郎著作本	
24	士郎著『懷疑者の群』改造社	大正4年11月	士郎著作本	
25	士郎著 短編集『獄中より』春陽堂	大正13年9月	士郎著作本	

主要参考文献

- 尾崎士郎 「青春第一期」『私の文壇生活を語る 十五作家』新潮社 1936年
尾崎士郎 『小説四十六年』講談社 1964年
尾崎士郎 『書簡筆滴』インパルス 1969年
尾崎士郎 「尾崎士郎」『私の履歴書』日本経済新聞社 1983年
黒岩比佐子 『パンとベン 社会主義者・堺利彦と「売文社」の戦い』講談社 2010年
都築久義 『実説・人生劇場 尾崎士郎の生涯』白馬出版 1972年
都築久義 『若き日の尾崎士郎』笠間書院 1980年